

Title	経済学の科学的性質と経済法則の意義
Sub Title	
Author	勝田, 貞次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.8 (1923. 8) ,p.1415(75)- 1427(87)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230801-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

經濟學の科學的性質と 經濟法則の意義

勝田貞次

凡そ吾等は經濟學の構成に關して對立せる二個の立場を考へ得ると想ふ、個人本位の立場と社會本位の立場とがこれである。個人本位の立場に立つものは經濟を以て營利と考へ營利經濟學を主張し、社會本位の立場に立つものは經濟を以て厚生の意義に解し厚生經濟學を主張する。

而して吾等としては營利經濟學をも厚生經濟學をも共に夫々の立場の範圍に於ては之を認めやらなければならぬ、『圓い机』と『木の机』とを夫々の立場より机を説明せるものとして許す

如く、營利經濟學と厚生經濟學とをも夫々の立場より經濟學を説明せるものとして許してやらなければならぬと想ふ。營利經濟學と厚生經濟學とは經濟學に對する二個の説明である。相容ないどころか却て相補ふ可きものである。詳言すれば營利經濟學と厚生經濟學とは經濟學其者の表裡二面に對する二個の説明として一方の説明洩れを他方が説明し他方の説明洩れを一方が説明して居るのである。

乍然、其代り營利經濟學も厚生經濟學も共に經濟學其自體でないことは吾等の注意しなければならぬ處である。營利經濟學も厚生經濟學も經濟學に對する一面の説明ではあるが經濟學其自體が何であるかを示さないからである。想ふに是れ未だ立場が不純であるからである、個人本位の立場も社會本位の立場も經濟學其自體に肉迫す可く餘りに不純である。従て吾等は茲に

の政策が最も重要である事、英國の銀行制度は最近の景氣循環に於て、恐慌に到達せしめなかつた事その結果不況期に於て取引の極端なる縮少を緩和し失業の續出を制限し得た事を述べて置いた。失業防止策として、好景氣時代に於ける取引の異常の發展を阻止する外、政府、都市及び其の他公共團體が、努めて建築又は道路の修繕等の經常費を不況時に節する事である。又或る特定の企業に對し國家補助を與へて金融の途を開く事も一策である。事業家の度に過ぎた樂觀の増長を制限する方法には上述の如く二つの方法があるが。この中第一條件である取引状態に從つて貸銀率を一層敏速に整理する事云ふ事は甚だ困難な事である。然し吾人が痛切に要求するが如く、景氣の逆轉期に於て貸銀が從來より一層急激に下落すれば、傭主をして生産を繼續するのに餘り大なる悲觀を爲さしめなくて済

み、同時に景氣の上騰期に於ては貸銀が從來より一層速かに昂騰して取引の活動を過度に刺戟する事を防ぐ事は寔に望まじき事である。この政策を採用する事に依つて長年の問題であつた貸銀争鬭の原因を減じ、景氣上騰期に於て不當に利益を多からしめ、取引豫想をして過度の樂觀に至らしめる原因の一部を撤去する事が出来るのである。更にこれに加ふるに、大藏省が紙幣發行高に或る制限を加へ又は銀行が聯合して貸出を制限するが如き政策を採用して物價の騰貴に或る制度の抑制を加へるならば、物價の騰貴から起る取引の人為的刺戟の一部を緩和し、それに依つて取引確信の過度の増長を阻止し、好況及び不況期の強さを制限する事が出来るのである。』

吾等の學的努力即ち吾等の思惟作用は一定の立場を構へて絶對を相對の構造に導き入れて相對の相に於て絶對を確保せんとするにあるのである。吾等の行爲や吾等の表現が絶對の絶對的統一であるならば吾等の思惟は絶對の相對的統一である、吾等の行爲や表現が絶對を内から開展するならば吾等の思惟は絶對を外から立場を切つて之を相對化して統御せんとするものである。思惟は絶對を一定の立場より切斷して對立の構造に導き入れて統一しようとするもので、其自體既に對立作用である。

從て思惟の進化は即ち斯る對立作用の複雑化に外ならない。而して對立作用が複雑となるに従ひ絶對を相對化する立場なり様式なりが緻密となり來る。即ち思惟の最初の階段に於ては對立作用は單に同一律に依て絶對を分析綜合するに過ぎないが夫が進むと因果律によつて絶對を原

因と結果に對立し其間に因果關係を捕捉せんとするに至る。然るに更に夫が進むと相互律に依て絶對を作用を交換し合ふ無數の因子の有機的關係として理解せん。するに至る。即ち因果律に依ては一個の原因よりして一個の結果の生ずるものとしてのみ絶對を理解するのであるが相互律に依れば無數の要因が作用を交換し合ふものとして絶對を理解するのである。因果律は絶對を原因と結果とに對立して其間の法則を理解せんとするが相互律は絶對を作用し合ふ無數の要因に對立して其間の有機的關係を理解せんとするのである。因果律よりすれば數個の原因より數個の結果を生ずる場合は當に非合理性としか考へられないのであるが相互律よりすれば數個の原因より數個の結果を生ずる場合もまた合理性として考へられるのである。寧ろ一個の原

因より一個の結果を生ずる因果關係は數個の原

もう一步進んで此二個の立場を純化して經濟學其自體に肉迫せんと欲する。然るに純化は常に歸一を意味する。一つに化することを意味する、從來屢々試みられたる如く、個人本位か社會本位か何れか其の一を取り他を棄つるの方法は立場を一に歸せんとする努力としては許さる可きも其の努力は全然間違つて居た。何となれば個人本位と社會本位との二個の立場を一に歸せんとするならば此の二個の立場の一を採り他を棄つる代りに寧ろ此の二個の立場を統一す可き第三の立場を發見するに努めなければならぬからである。

勿論斯くて發見された第三の立場も更に第四の立場と對峙する爲めにそこにそれらを統一す可き第五の立場を揚示せざる可からざるに至ることへーゲルの辯證法に於ける如きものありとは云へ、經濟學に肉迫する爲めに立場を漸次統

一して行かねばならぬ事に關しては異議なき事と想ふ。但し立場の統一は更に立場の統一を要求して其の極まる處を知らざる爲め如何に統一されたる立場と雖も更にそれ以上の立場から見れば結局不完全なる立場たることをまぬがれず從て經濟學其自體と完全に合一するを得ざることは余儀なき次第であるが、然し立場が統一に統一されて進むに従て漸次經濟學の殿堂に向つて歩一歩近づく可き事は茲に吾等の一考に價する事と想ふ。即ち吾等の學的努力は立場の統一を深めて行くことにあつて決して絶對的の立場に立とうとする事ではないのである。元來『立場』なるものは『絶對』を相對化する作用を爲すのであるから絶對的の立場と云ふ考へは其自體既に矛盾した考へであるのである。眞の學的努力は立場の統一を深めることに依て絶對を相對化し絶對を相對的に捉へんとするにあるのである。

首し得るであらう。然らば經濟的全體性とは何ぞ、經濟的部分相互の關係とは何ぞ。

想ふに經濟的全體性とは經濟の理想に相當するものであり、經濟的部分相互の關係とは經濟の理想を實現すべき手段に相當するものである。吾々の所謂『經濟』なる言葉の中には經濟の理想を實現す可き手段の二者が含まるゝのであつて此二者を混同する結果經濟なる言葉の意義が明瞭を欠くに至るのではないのか。即ち經濟なる言葉の意義は經濟的理想を實現す可き經濟的手段の意義に外ならない。然るに全體の立場から經濟の意義を見れば即ち厚生となり部分相互の關係の立場から經濟の意義を見れば營利となるから經濟的理想は即ち厚生であり、經濟的手段は即ち營利に外ならぬので、從て經濟とは營利の手段に訴へて厚生を實現せんとすることになるのである。

現に吾等の經濟生活を全體として見れば夫は確かに生活一般の向上に資して居るけれども各個人の立場に立て見るときは各個人はみな他の各個人に對して營利の關係に立つて居るのであつて別に他の個人の生活の向上を目的とはして居ないものである。各個人としては營利の關係に立ちながら夫を立場を替へて全體から見るときは生活一般の向上を來すに至つて居ると云ふことは即ち營利と云ふ事を手段として厚生に理想に資して居ることに相當するのではないか。斯くて營利によつて厚生が可能となるところに經濟の意義があるのではないか、換言すれば如何なる營利も必ずや其の根源に厚生を包含んで厚生に對する手段として役立つと共に如何なる厚生も手段に依らずしては實現せられず必ずや營利の如き手段に依てのみ自己を實現せざるを得ざるところに經濟の本義はあるのではない

因より數個の結果を生ずる有機關係の一部分として其のうちに含まるゝ考へられる。從て因果律もまた相互律の一の場合と考へらるゝに至る、斯くて因果律が相互律に進む處に新しき思惟の出産があり科學の種別が可能となるとも見られ得る。

即ち因果律なる對立構造に依て絶對を相對化せる處に自然科學の世界が生れ相互律なる對立構造に依て絶對を相對化せる處に社會科學の世界が生ずる。即ち自然科學は因果律の產物であつて因果關係を内容とし社會科學は相互律の產物であつて有機關係を内容とする。自然科學の世界に於ては一の原因から一の結果を生ずるが社會科學の世界に於ては多數の原因から多數の結果を生ずる、否寧ろ多數の因子が全體性を實現する様に相互に作用を交換し合つて居る有機關係の世界が社會科學の世界であり一の原因と

一の結果とが常に機械的反覆を示せる因果關係の世界が自然科學の世界である。

從て自然科學の世界に於ては部分と部分との間の連續の必然性が問題となるのであるが社會科學の世界に於ては部分と部分との間の相互關係の全體實現性が問題となるのである。即ち自然科學は部分と部分との間の必然的連續性を見んとするのであるが社會科學は全體の目的に應ずる爲めに部分と部分との間は如何なる相互關係を行ふかを見んとするのである。

故に自然科學は常に部分と部分との平面的機械的關係を問題とするのであるが社會科學は全體と部分、目的と手段との立體的實現的關係を問題とするものである、從て一個の社會科學たる經濟學が立體的關係を對象とす可きもの換言すれば經濟的全體性を實現せんとする經濟的部分相互の關係を對象とす可きものたることを肯

抽出に過ぎない。眞の經濟學は營利經濟學と厚生經濟學の交叉點上に横はる。厚生學の立場も營利の立場も經濟學の立場の兩極端に外ならぬので此の兩極端が合一する處に經濟學の立場が可能となるのである。而して如斯眞の經濟學が厚生學の理想に關する範圍の營利的有機構造を研究對象とするものとせは經濟學に因果法則を求めるところの不可能なるは自明の理であつて經濟學に於ては有機法則を求めらるゝも因果法則は求められ得ぬ。

然るにリツケルトは因果法則に對するものを有機法則とせずして個別法則と考へて居るが然し個別と云へば已に必ずや全體性の中に含み全體性を實現する爲めの有機關係の一員たる可きではないか。而して斯る全體的關係を全體的關係として見るとところに有機法則が考へらるゝのであるからリツケルトの所謂個別法則なるもの

は其實有機法則と考へられないであらう。然るにリツケルトは數多の原因から數多の結果を生ずる有機法則を分解して一の原因から一の結果を生ずるものとして見んとしたからそこで勢ひ此の世の中で一回限りしか反覆されぬ因果關係としての個制法則となるに至つたのである。彼は無數の個別法則が集つて有機法則を構成せる點を看過したのである無數の個別法則は結局有機法則の構成分子に過ぎないもので個別法則は有機法則の相に於てのみ初めて法則性を完全に發揮し來る可きものなることを看過せるものである。即ちリツケルトの所謂個別法則なるものは抽象されたる有機法則に外ならず、有機法則は全體化されたる處の個制法則に外ならぬ、多くの個別法則は依屬關係に於て有機法則を構成して居るのである、寧ろ一個の有機法則を分解して相互關係を無視し個々の分子として探出し

いか。

從て經濟の本義は厚生のみによつても理解することを得ず、營利のみに依つても理解することを得ない、經濟の本義を理解するに營利のみを以てするときには利のみ走る賭博的行爲をも經濟行爲と云はざるを得ざるに至るとともにまた經濟の本義を理解するに厚生のみによるときは厚生を可能ならしむる手段の必要を無視するの愚を學ばざるを得ざるに至るであらう。即ち眞乎の經濟は賭博にもあらずまた純然たる厚生にもあらず賭博と厚生の間を進まんとするのである。純然たる交換も純然たる生産も吾等は經濟と考へることを得ぬ、眞の經濟は交換的生产である交換を標準として生産を爲すにある。交換の手段によつて生産の意義を有效ならしめる所に經濟の意義はある、換言すれば營利の方法によつて厚生の理想を達するところに經濟の意義

はある、何等營利の方法によらずして達せらるゝが如き厚生は經濟的厚生ではあり得ない。經濟的厚生の經濟的厚生たる所以は營利の方法によらずしては達せられない處の厚生である。と同時に如何なる營利も厚生の理想に反する限りに於て夫は經濟的營利とは考へられない。經濟上營利と云はるゝものは必ず厚生の理想に應ずる範圍のものに限る、厚生の理想を實現し得べき方法となり得る營利に限る。

此の厚生の理想を實現す可き營利作用の構造を研究せんとするのが經濟學である。即ち無數の經濟的要因が厚生の理想を實現する上から見て如何なる營利的有機關係を爲すかを見んとするものが經濟學の本義である。厚生の理想にかゝる範圍に於ける營利的有機關係を對象とするのが經濟學の根本である、既に述べたところの厚生經濟學も營利經濟學も共に經濟學の兩面の

ち左表の如くである

文化〔自然的文化科學（自然科學）—因果法則科學〕社會的文化科學（社會科學）—有機法則

次にリツケルトは歴史を科學なりと考へんと

したが元來歴史なるものは科學と共に一個の統一形式 Methodologie に過ぎないものではない

のか。實在統一の様式ではないのか。思惟に依て實在を科學的に統一する如く情意に依て實在を歴史的に統一するのではないのか。即ち科學

が實在の思惟的統一である様に歴史は實在の情意的統一として見られぬであらうか。リツケルト

トの所謂個別法則なるものは情意の發展と云ふ意味に解せらるべきものではないであらうか。

實在を情意によつて歴史的に統一せる場合をこに文化史の世界が生れ創造發展の世界が産れる

のであるが實在を思惟によつて科學的に統一すればそこに文化科學の世界が可能となるのでは

ないのか。從て左表の如く

文化科學〔科學的形式に依て統一せられて文化の一面〕社會科學的文化〔史的形式によつて統一せられて文化の一面〕

文化は科學的に統一せらるれば文化科學の對象となり歴史的に統一せらるれば歴史の對象となるのである。而して歴史と云ひ科學と云ひ夫等

は總て一定の内容を統一すべき形式に外ならないのであるから從て何々内容の科學的統一何々

内容の歴史的統一と云ふ意味に於て夫々内容となるべきものゝ下に附加して何々科學何々史と

云ふ可きである。歴史も科學も内容を統一すべき形式であつて内容ではない。歴史と云ふもの

科學と云ふものが存する譯ではない。歴史と云ひ科學と云ふは内容を統一整理すべき方法であり、形式である。歴史も科學も共に實在を統一

し内容化する處の純粹形式であるの下であるから、

たものが個別法則に外ならぬ、從て吾々はリツケルトの個別法則なる言葉を徹底せしむれば即ち有機法則として考へるのが至當であらうと思ふ。

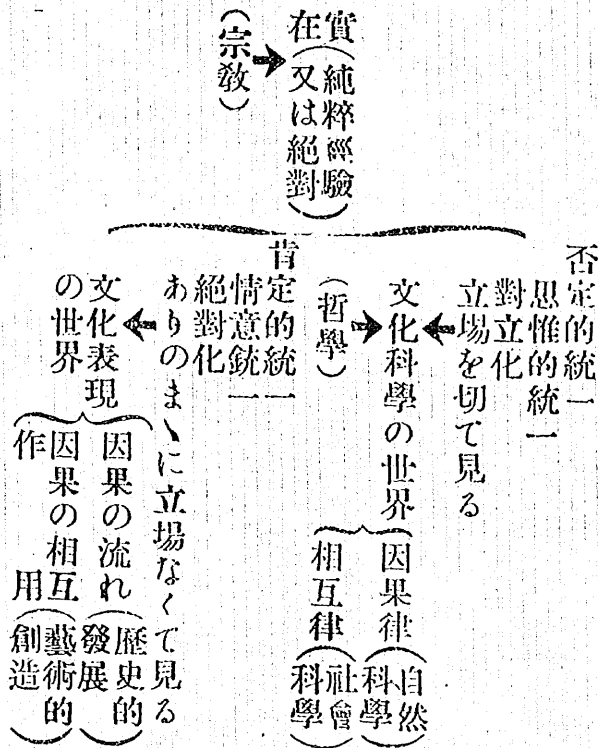
勿論リツケルトが個別法則を主張したのは歴史の論理構造を考へる爲めであつた。歴史を文化科學と解する爲めに一個の文化法則を打立てる必要上文化法則を個別法則なりと解するに至つたのであるが然し果して文化法則の論理的性質は個別法則として説明され能ふであらうか。換言すればリツケルトは個別法則を以て文化法則となし之を自然科學と對立せしめたのであるが果して文化法則は自然法則と對立せしめられ得るものであらうか。果して文化と自然とは對立の關係に立ち得るものであらうか。寧ろ自然

は已に文化の一部分ではないであらうか。自然科學が已に文化の產物である以上その自然科學

の對象たる處の自然も文化の一部分なりと云ひ得られないであらうか。吾々が自然を自然として限定し得るのはこれ一に價值判斷の結果に外ならないが斯る價值判斷を可能ならしむるものは既に一個の文化價值ではないであらうか、從て強いて區別すれば自然的文化と社會的文化とにす可きであらう。即ち自然と對立せしめらる可きものは文化にあらずして社會である。文化のうち自然と社會とが種別せらるゝのである

即ち必然性が相互性か其の何れの立場によつて文化價值が規定せらるゝかによつて或は自然的文化となり或は社會的文化となり來るのである即ち因果律によつて絶對を相對化し來ればそこに必然的文化價值を對象とする自然科學の世界が生じ相互性によつて絶對を相對化し來ればそこに有機的文化價值を對象とする社會科學の世界が生れ來るのである、之を圖を以て示せば即

統一すればそこに社會的文化科學の世界が生ずるのである、同様に因果の流れに重きを置いて實在を實在としてありのまゝに見てこようとすれば即ちそこに歴史的発展の世界が生れ無數の因子の相互關係が全體性を實現せんとする所謂有機生活に重きを置いて實在をそのまゝ受け入れてくれば、そこに藝術的創造の世界が生れるのである。之を表記すれば即ち左の如くなる。



尙學問分類の點より見て洩れたりと思ふものは哲學と宗教とであるが、元來哲學なるものは科學の科學であつて科學構成の方法論なりと考へられるから内容的に學問を分類すれば自然哲學は分類表のうちには表はれ來らぬことになる、同様に宗教は實在其者を實在其者として無爲無作のうちには捕捉せんとするものであるから内容を主とする分類表には表はれ來らぬ。

が茲に右表に就て最も吾等の考慮を要するものは純粹經驗を純粹經驗其自體としてそれと合一して離れざる處の宗教的態度と純粹經驗を飽くまでも純粹經驗として見るけれども而も尙之を統一せんとする處の表現的態度と純粹經驗を一定の立場より統一し再構せんとする科學的態度との三個の態度の間の根本的の差異である。が斯る態度はそも如何にして可能であるか。私を以てすれば夫は一に集つて全體と部分との對

その純粹形式である處の歴史と科學とを連ねて歴史科學と云ふを得ない。若し歴史科學と云ふならば夫は歴史を對象とする科學と云ふ意味となる。詳言すれば歴史はそも如何にして作らる可きやを研究せんとする科學と云ふ程の意味となつて決して文化史の意味とはなり來らぬであらう。形式を形式の上に附加して一の形式を他の形式の内容とすることは即ち方法論的研究を意味するからである。歴史科學と云へば歴史の方法論的研究の意義となつて決して文化史的意義とはならぬ。吾々は歴史と科學とが夫々實在統一の形式であることを知らねばならぬ。

元來實在(純粹經驗又は絶對)が意識のうちに入り來る爲めには何等かの意味に於て統一されなければならぬ。斯る統一には二種ある。一は實在を否定的に統一することであり、他は實在を肯定的に統一することである。換言すれば

否定的統一と云ふのは一定の立場を切つて實在を相對的に統一する方法である。即ち思惟的統一である。然るに肯定的統一と云ふのはベルグソンの云ふ様な同感的統一である即ち何等の立場なき立場に立つて實在を實在としてありのままに絶對的に統一する方法である、即ち情意的統一である。文化なるものは斯くて統一せられたる實在に外ならない。否定的に統一せられたる實在も肯定的に統一せられたる實在も共に文化として考へられ得る。實在が否定的に統一せられた場合には文化科學の世界が生れ實在が肯定的に統一せられた場合には表現の世界が生れる。而して一の原因から一の結果を生ずる處の所謂因果の流れを見んとする因果律の立場に立つて實在を科學的に統一すれば、そこに自然的文化科學の世界が生じ無數の原因結果の相互關係が全體性を實現せんとする所謂有機生活を見んとする有機律の立場に立つて實在を科學的に

し表現的態度は個體の表現の手段とするのである。従て表現的態度並に科學的態度にあつては純粹經驗は常に否定的原理として働くのである即ち純粹經驗の論理的構造は否定的原理に外ならぬ。否定的原理と云ふのは純粹經驗が純粹經驗にあらざるものを純粹經驗にあらずとして否定する作用である。斯る否定作用あるが故に純粹經驗に非らざるものが現象の世界として規定せられ得るものである。而して現象界の統一は純粹經驗の否定作用に依て可能となる。純粹經驗が純粹經驗にあらざる現象界を否定する作用は即ち夫を現象界から見れば現象界の統一力として現はるゝものである。全體と部分との對立は純粹經驗から見れば非純粹經驗的のものであつて、斯る非純粹經驗的のものとして否定せらるゝことによつて却て全體と部分との對立が現象界統一の根源となり得るに至る。

科學的態度は全體と部分との對立に加ふるに部分を全體よりも重しとなす非純粹經驗的態度を採ることによつて益々純粹經驗に反抗し純粹經驗の否定的統一力を利用して之を以て現象界を統一し指導する原理たらしめんとするものである。而して斯る科學的態度を更に立場によつて規定することによつて益々純粹經驗の否定的統一力を強むるに至る。經濟學は經濟學的純粹經驗をば厚生と云ふ全體性と營利現象と云ふ部分性とに分ち更に營利現象相互の有機的關係によつて厚生と云ふ全體性を實現する様に見ることによつて經濟的純粹經驗の否定的統一力を利用し依て以て經濟的有機法則の理解に達せんとする一科學である。

立に存すると想ふ。即ち宗教的態度なるものは全體と部分との對立を零化して全體即部分の妙境に徹せんとするものであるに反し表現的態度も科學的態度も總て是等は全體と部分との對立を是認し之を基礎としてこの全體と部分との對立關係を通じて純粹經驗に觸れんとするもので

構である。即ち部分を集めて全體を築つこうと云ふ態度で純粹經驗に臨むのが科學的再構的態度であり、全體を表はし得る様に部分を集成しよう云ふ態度で純粹經驗に臨むのが表現的模寫的態度である。

あると思ふ、只表現的態度の場合にあつては全體と部分との關係を通じて出來得る限り純粹經驗を模寫しようとするのであるが科學的態度の場合にあつては全體と部分との關係を通じて純粹經驗を再構しようとするのである。然らば模寫と再構とは如何に違ふかと云ふと模寫の場合にあつては常に部分性が全體性に從ふて居るのであるが再構の場合にあつては部分性が全部性を左右せんとして居るのである。詳言すれば全體を表はし得る様に部分を集成するのが模寫であつて部分を集めて全體を築こうとするのが再

即ち宗教的、科學的、表現的、と云ふ三個の方面を生ずる原因は純粹經驗に對する個體の態度の差異にあるのである。個體の要求を棄て純粹になり切らうと云ふ純粹なる態度を以て純粹經驗に臨むのが宗教であり、飽くまでも個體の要求を基礎として、それに依つて純粹經驗を利用しよう云ふ態度を以て純粹經驗に臨むのが科學的態度であり、個體を以て純粹經驗を書き出す繪筆であり、繪紙であり繪料でありと見て個體によつて全體を寫さんとする態度にて純粹經驗に向ふのが表現的態度である。即ち宗教的態度は個體を否定し科學的態度は個體を基礎と